

大学院薬学系研究科・薬学部

Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Faculty of Pharmaceutical Sciences

大和田 智彦 教授

<http://www.f.u-tokyo.ac.jp/>

大学院薬学系研究科・薬学部の源流は明治6年(1873)東京医学校製薬学科の開設にさかのぼることができ、その後の何回かの大学制度改革を経て現在の姿を得ています。特に明治26年(1893)の講座制定により、医学部薬学科に生薬学(下山順一郎)、衛生裁判化学(丹波敬三)、薬化学(長井長義)の3講座担任が発令されたことが現在の研究組織の原型と言っ

て良いと思います。このように長い歴史をもつ本学部・研究科ですが、その研究対象は当初より一貫して生命科学(ライフサイエンス)研究とあって良いと思います。「化学」と「生物」の関係を研究する学部・学科はいくつかありますが「医薬品(薬)」という一番難易度が高く、かつ高い完成度の要求される「物質科学」と、「人間の健康(裏返しの意味として疾患)」という一番私たちが知りたい「生命活動の科学」の融合を探求する部局は、大学院薬学系研究科・薬学部において他にないと自負しています。私たち薬学部、および大学院薬学系研究科の使命(ミッション)の説明には「薬学は、医薬品の創製からその適正使用までを目標とし、生命に関わる物質、およびその生体との相互作用を対象とする超領域的学問体系である」と書かれています。そのため、有機化学、生物有機化学、生化学、分子生

物学、生物物理学、薬理学、薬剤学、遺伝学、等々多様な基礎科学を基盤とした教育が行われ、また各分野の先端的な研究を行う研究室が一つの建物の中に組織されています。このような研究分野の配置は、21世紀COEプロジェクト「戦略的基礎創薬科学」として有機的な連係・学部内共同研究を推進する場として生かされています。大学院薬学系研究科・薬学部における研究は、基礎研究を重視しつつも、「医薬品」や「人間の健康」という最高峰の目標に視野を向けていることが最大の特徴です。

大学院薬学系研究科・薬学部は現在も変革し続けています。社会の健康に対する制度改革を、高度専門薬剤師として高まりとともに、医薬品の持つ経済学的な価値を、医薬品の適正な使用により研究を重きを置いた研究・教育を行い続けベンチャーの人材育成など、社会が基礎研究・学部の使命であると考え分野の教育研究への期待が高まっています。これらの期待に応えるため、すでに寄付講座、創薬科学連携客員講座、産学連携共同研究室を設置し、これまでの薬学になかった新しい分野の教育研究を加速させようとしています。また2004年には、医薬品の有効性と安全性の評価科学を研究・確立することを目的とする「医薬品評価科学講座」が新設され活動を開始しています。

薬学部では伝統的に実験が重視され、全学

部の中で最もハードといわれる教育課程になっていますが、講義内容や実習内容はもちろん将来の進路についても熱心に教員に質問・議論に来る学生も多く、教員もそれを歓迎しています。ほとんどの学部生が大学院修士課程に進学し、研究に励み、さらに大学院博士課程への進学、学位の取得を目指しています。そのため、1学科=1学部=1研究科という比較的少人数の部局にもかかわらず、大変にぎやかな活気ある家族的な雰囲気を持っています。2006年度入学の学生から新しい薬学教育制度が導入され、本薬学部も2学科



